

A I Tワークショップとは参加する学生が共通テーマを設け、それに沿う形で各自のワークショップ目的を設定して事前準備をし、タイで団体等の訪問を行って得た成果をA I Tの授業およびお茶の水女子大学で報告するというものである。

今年度のワークショップには複数の専攻から4名の学生が参加し、共通テーマを「日タイ相互研究—ジェンダーの視点から」とし、それぞれ研修目的を設定し事前準備を行った。私の研修目的は「タイにおける難民支援—日本の第三国定住プログラムに対するタイ側の反応を中心に」であった。全日程は15日間であったが、その内6日間参加した。研修目的関連団体としてU N H C Rバンコク事務所と難民支援を行う国際N G Oの2件を訪問した。難民キャンプを訪問できればなお良かったが、今回は都合により訪問できなかった。

研修後の報告として簡単に三点述べる。一点目は、私自身の研修目的の達成度である。今回訪問した団体で応対してくれた方が第三国定住担当ではなかったため、残念ながら最も知りたかった点についてタイ側の意見を聞くことはできなかった。しかしながら、国連機関とN G Oの二種類の組織を訪問したことで、それぞれの組織の位置付、活動の特徴、連携の仕方がわかったこと、両者を対比することができたことは興味深かった。また、それぞれの組織の担当者から担当する活動の内容を直接、詳しく聞くことができたこともよい点であった。

二点目に反省点について述べたい。大きな団体は、活動分野ごとに担当者があり、自分の専門領域以外の活動については知らないことが多いので、訪問する際には研修目的に合わせて、特定の担当者を事前に指定しておく必要があるということである。さらに望ましいことは担当者に質問事項を事前に知らせておくことであろう。そうすると、担当者は訪問者の関心がどの点にあるのかわかり、準備もしやすいのではないかと思われる。

三点目に感想を述べる。大きな組織の特定の活動についてより詳しく知りたければ、その活動に従事するアプローチの仕方が異なる複数の担当者（例えば法的、心理的などの違い、担当者の性別などに配慮してバランス良く）に複数回の聞き取りを行うこと、そして実際に活動を見学することが望ましい。さらに重要なこととして活動の対象となっている人々の声を聞くことは欠かせない。

A I Tワークショップのように短い日程の中で、複数の参加者の研修目的関連団体を訪問しなければならない場合、個人の研修目的の達成を十分に充実させることは難しくなる。また、団体を中心に訪問し、英語を使用した聞き取りを行うため、場合によっては現地の当事者の声を聞くことが困難である。したがって、研究のフィールドが別にあるとか、文化人類学的な調査を好む者にとっては、A I Tワークショップは政府機関やN G Oなどが行うような海外視察の行いかたの訓練として、もしくはタイにおける研究調査の足がかりを築く機会として捉えると良いと思われた。

最後に私はこのプログラムを次の点から、修士課程と博士課程の学生にお勧めする。A I Tワークショップは、事前準備に十分な時間を割き、A I Tと早くから綿密に連絡を取り合っただけでスケジュールを組むのであれば、研究行為（文献検討、研究目的の設定、調査、報告書の作成）を凝縮した形で経験できる非常に重要なプログラムとなると思われる。研究行為の実際がよく掴めていない修士課程の学生にとっては学びの大きいプログラムである。短い修士課程では時間が取れなかった博士課程の学生で海外調査や外国語での調査を考えている人にとってもよい訓練機会となるだろう。また、二つの大学にサポートしてもらっているため、安全であり、非常に快適でもあるので、海外経験のない人にもお勧めできる。ワークショップのスケジュールはハードではあるが、ちょっとした休暇を味わえる時間もあり、全体として有意義で心に残るものとなるだろう。研究に関心を持っている人、海外調査に関心を持っている人はぜひこのプログラムで経験を積まれてはいかがだろうか。

写真はチェンマイ大学の女性センターで、教授と職員らと。歴史的に日本と関係の深いタイとの交流の必要性を強く感じた。